

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：53301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02025

研究課題名（和文）フッサール身体論の倫理的展開：身体行為のなかでの非自覚的自己と責任の所在

研究課題名（英文）Husserl's theory of body and its ethical development

研究代表者

鈴木 康文（Suzuki, Kobun）

石川工業高等専門学校・一般教育科・嘱託教授

研究者番号：50302336

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においてフッサールの身体論に関し、日常的な行為において生じる責任の所在について確認した。そのため、その行為にあたって関与する知覚認識や具体的行為にあたって介在する意志、さらには自我のあり方を問うた。

知覚認識に関しては注意機能に着目し、不注意・見落とし等との対比から分析をすすめた。それにより、不注意自身が認識されることが可能かどうかを議論した。その際認知科学の知見を援用し、意志の介在と倫理的な責任の所在を明らかにしていった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

知覚における注意/不注意については、常識とされていることと実体験には大きなギャップがあり、また責任問題に発展する事象についても、注意/不注意に帰ることがどの程度妥当か再考を要する事態が予想される。また注意が、たとえば知覚や想像のような特定の作用ではなく、ある作用の下で機能しており、その働きそのものを対象として捉えられないことが、この問題を考察する困難さを増している。

本研究においては、自動車運転など日常的な身体行為とそこに介在する知覚（および注意機能）を題材として注意現象を現象学はどのように捉えたのか考察し、行為に関する責任の所在を検討した。

研究成果の概要（英文）： In this study, regarding Husserl's theory of body, I followed the responsibility of daily activities. Therefore, I clarified the perception involved in the act, the intervening intention in the concrete act, and the way of the ego.

Regarding perception, I focused on the attention function and proceeded with the analysis based on comparisons with carelessness and oversight. Thereby I argued whether carelessness could be perceived. At that time, I used the knowledge of cognitive science to clarify the interposition of will and the place of ethical responsibility.

研究分野：倫理学

キーワード：現象学 身体論 倫理学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 現象学の創始者であるフッサールに対する近年の研究動向は、身体論よりは時間論、相互主観性論、および彼の倫理学が中心となっている。これは、時間論に関しては、刊行が待たれた彼の中期(ベルナウ草稿)や後期の遺稿が発刊され、彼の時間論の全貌が明らかになってきたことによる。また相互主観性論も、時間論のなかからの相互主観性が問われる方向性が強かったことが要因のひとつである。また彼の倫理学は、これまで断片的にしか知られておらず、どちらかという傍流とされていたが、彼の講義録がようやく数点出版されたことによる。

以上のような研究動向のなかで、本研究の課題である身体論を中軸とした研究は十分に展開されているとはいえない。

(2) 本研究は、具体的な身体行為をとりあげ、その行為の責任の所在にまで探究する。これはすなわち行為を遂行するなかでの自己反省の可能性とその責任のあり方を問うものである。この論考は、フッサールの身体論が主なテーマであるので、彼の身体論の中心概念である「キネステーズ」や「機能する器官」、さらに「身体中心化」を中核に分析することになるが、運動を採り上げ、また後からの振り返りである自己反省に関連するので時間論が、また行為の結果に対する反省と責任を主題とするので、彼の倫理学が関わってくる。すなわち本研究はフッサールの身体論を中心軸とし、彼の時間論と倫理学が関連研究分野として位置づけられる。

(3) 申請者は、すでにフッサール前期の『物と空間』講義を資料として、均一空間が身体によっていかに認識されるのかを分析した。またさらに中期『イデー II』を解釈して、動物としての人間の身体理解および人格を持った人間の身体についての研究にあたった。そこでは、「キネステーズ」の概念分析から、具体的には知覚を中心とした身体の機能を主なテーマとした。それらの分析における身体の機能を研究する中で、具体的な(ある意志や衝動、感情をもって)行為する身体と自我の関わりについてその意義を明らかにすべく、本研究を着想した。

(4) また申請者は、具体的な事象分析として、身体と行為のなかで、「生き生きした時間」のもとでのキネステーズの機能を分析した。フッサールの時間論研究においては、自らを対象化し後から振り返ってみる自己反省が、時間の流れのなかではその機能を捉えられないという反省の限界、それにもかかわらず対象化された自己とは異なる仕方では自己が覚知されているという事象は、すでに定式化されている。申請者はさらに行為の遂行という具体的事象のもとで、反省の解明に着手した。またこの分析に関わるが、フッサールは能動的な知覚においては機能する自我と身体機能とをいわば同一視しているのに対して、受動的な「世界の開示」から両者の機能を再規定したことを示した。

(5) 以上の研究成果を踏まえ、反省を後から振り返るという時間論の狭義の意味だけではなく、具体的な自己の行為に対し(つまり自己身体の直接の関与のもと)反省し、さらに行為の主体としての自己(自我)の関わりと責任についても問われるべき課題であること、そして現象学が具体的な事象分析をいわばテーゼとしていることが着想に至った経緯である。

## 2. 研究の目的

(1) このような状況にあつて当該研究は、フッサールの身体論を時間論の成果と融合させた上で、倫理学上の課題のなかでその分析の意義を明らかにした。

フッサールの身体論に関する研究は、視覚のなかでのキネステーズの分析から始まる空間構成、あるいは触覚のなかでの自己接触からの自己身体構成、さらには相互主観性論への橋渡しという議論が典型であった。それはあくまでも身体運動を扱うもので、(意図的・自覚的であれ、非自覚的であれ)身体行為とその責任の問題までは、事象分析はなされなかった。本研究では特に非自覚的な行為のなかで、反省がいかに機能しているのか、また行為の主体(とされる)自我がいかに関与しているのかを分析した。さらに行為の帰結を自らの選択の結果として引き受けるときに現れる主体を問うものである。

(2) すでに現象学は、前者の機能する自我のあり方と後者の責任の所在としての主体との間に、大きな齟齬があることを導いている。またこの問題は、自我に関わる心理学実験でもすでによく知られている事象であり、また法学ではその同一性をいわば擬制として規定している。すなわち法的には擬制の名のもとにおかれている問題を、具体的な行為の分析のなかで倫理学の問題として定式化し、現象学的アプローチを試みる。身体をいわば無意識的に動かすという日常的な事象を現象学的に分析することにより、フッサールの身体論を時間論、倫理学の両側面から総合的に分析し位置づける。本研究は、この上述の齟齬を確認するばかりではなく、前者から同一の自我という責任主体がいかに構築されるか、さらには前者がいかに後者によって隠蔽されるのかを明らかにする。この試みは、フッサールの倫理学研究が現在相互主観性の問題の発展のなかから問われ、あるいは人格の徳から問われる傾向が主流の状況下に、新たな試みとして位置づけられる。また前者の自我問題についても、すでに時間の流れのなかで、自我のある種の脆弱さが解明されているが、身体機能との作動性からも解明される必要がある。そ

れによって、フッサー自身は身体と自我とを機能面において同一視したとされていたことが再度捉え直しされる。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究は、フッサーについては、三方向から資料収集にあたり、その資料整理と検討、および考察をなすものである。

既刊のフッサー全集(主に中後期講義録、遺稿)の電子書籍版をもとにして、その検索機能を使用して該当資料の収集調査をする。

未公開草稿を使用した先行研究を通じて、身体に関する草稿資料の収集にあたる。

ケルン大学フッサー文庫に出向き、未公開草稿を資料収集するとともに、先行研究の引用妥当性を考察する。

以上のように資料を博搜した上で、身体行為に関する倫理的研究に関する分析と解釈に従事する。

(2) また本研究は、日常的な知覚認知と具体的な身体活動の現象学的分析に基づくが、現象学自身が心理学、認知科学、脳科学の知見を踏まえた研究が従来からなされているので、それらの学識を生かし、また批判的に対峙している研究を把握していった。

(3) さらに、本研究はフッサーの倫理学研究にも踏み込んでいるが、特に彼の意志論に着目して、彼自身の思想展開を捉えた。その一貫として、哲学史上の意志論をヨーロッパ中世から近代にかけてのその系譜を探究し、身体行為における意志の介在に関する研究を、哲学史上の歴史的視点からも意味づける一助とした。

(4) その他に、身体行為における自我のあり方やその認識、さらにはその責任の位置づけといった主題については、西田幾多郎がやはり、フッサーを始めとしてW・ジェームス等の影響を受けながらも、行為的直観論として集約させているので、本研究者がいままで手がけてきた西田研究を発展させる形で、フッサーとの比較をして、彼の独自性をこの比較研究の点からも明らかにした。

### 4. 研究成果

(1) 本研究は、日常的な(非自覚的で)具体的な身体行為を事象として探究するものである。そのため、その行為にあたって関与する知覚認知や具体的な行為にあたっての介在する自覚的とはみなされない意志、さらには自我のあり方を問うこととなる。知覚認知に関しては注意機能に着目し、不注意・見落とし等との対比から分析をすすめた。その際認知科学の知見を援用し、意志の介在と倫理的な責任の所在を明らかにしていった。事象としては、物の知覚をあつかうものの、それを認識モデルとして学の真理妥当性を見出す探究とは異なる分析と解釈を要する。

(2) 本研究は、まずフッサーの知覚論における注意の機能について論じ、それとともに不注意がいかに生じるかについても考察した。それにより、不注意自身が認識されることが可能かどうかを議論した。このため認知科学における「不注意盲」を事例として取り上げ、この現象が知覚のなかでいかに生じるかを分析した。

そのためにまず、初期フッサーの知覚論と注意論を取り上げて、知覚における注意機能について概説する。フッサーは注意機能を大きく思念としての注意と、関心としての注意に区分しているため、それぞれの機能がいかに知覚における対象認識に寄与しているかを明示した。そして不注意現象をこの知覚論の中に位置づける。注意は、たとえば知覚や想起のような単独の一作用として存立しているものではなく、ある作用の下で機能しており、さらにたとえば知覚自身が複合的な作用であるため、そのため注意・不注意もさまざまな様態がありうることになる。

それによると、注意は志向性のように方向付けをもつが、しかし志向性とは異なり、あくまでも際立たせという機能であり、知覚を含めさまざまな作用の様態として捉えられるものであった。またそれは際立たせということから、抽象作用とも異なっていた。ただ注意するという一般的な表現から類推されるような、スポットライトをあて際立たせるという機能だけでは不十分であることも示された。すなわち注意の機能によって初めて、認識されるべき対象が対象として境界づけられ自立的に規定されるのであり、もし注意されていない場合には、その自立性をもたないまま捉えられることとなる。これは注意される前から対象は規定され、それが注意によってより明確化されるという一般通念とは大きく異なるものである。注意をスポットライトに喩える比喻も、意識(眼差し)をそちらに向ければ、注意が働いていると見なすならば、それだけでは事物の認識は成立していないので、それは誤解を招くことになる(それゆえ、それをただちに不注意であるとみなし、そこに責任の所在を認めることは早計となろう)。そしてこうした注意説は、変化盲から導かれる新たな知覚説につながることを示した。

(3) さらに知覚による認識は、それ自身複合的な作用であり、それゆえその作用のそれぞれにたいして寄与しうる注意機能はさまざまであり、逆に不注意もさまざまな様態があり得ることを明らかにした。そのなかでも不注意は対象が直観されながら、認識されないという特異な一事象であった(また直観されることが、すなわち認識されることではないという事例となった)。対象がまさに与えられ、際立ちながら、自我がそれに関心が向かないことから、たとえ視線がそちらに向いていても(固視)注意はなされておらず、認識には至らない。それは別の対象に注意が向いており、そのいわば文脈とはかけ離れた対象については、注意は行き届かないわけで、注意自身がたとえば視野全体に機能するものではなく、ある配分のもとになされることからくる。さらにこのような見落とし現象は、そもそも関心を引かず、意味的な規定そのものが覚起されていないと思われるので、あとからその見落としした対象の認識がなされることがきわめて困難といえよう。それゆえ、見落とし現象自身の認知が成立する余地はないといえる。その際、特に時間の把持における意味機能(思念の問題)を分析することにより、注意機能の役割を、時間論のなかで位置づけることを試みた。しかしそれが他者からの指摘からではなく、自身の反省から認識に至りうるかという課題については、時間論を踏まえてさらに検討する必要があるが、それはまた今後の研究課題として残された。

(4) 次にフッサール後期の思索の知覚論を、受動的総合および地平論から記述した。初期のフッサールの知覚論は、知覚における認識が成立した場合において、直観(認識された対象の)意味、さらに注意などそれぞれの機能について規定しているが、認識に至る動機付けおよびその過程から議論されていなかった。そこで与えられた感覚与件(ヒュレー)から知覚認識がいかに成立するのか、そしてそこにおいて感覚与件がいかに構造化され認識に寄与するかを明らかにした。

そして次にこの後期の受動的総合およびそれに基づく知覚論を踏まえて、知覚に関わる注意について一定の類型付けを試みた。受動的総合からそれが触発し能動的な知覚認識にいたるなかで、傾向としての注意機能のさまざまなあり方を記述した。これはフッサールが初期において注意に関心として分析していたが、それをさらに展開させたものである。最後に「不注意盲」として知られるようになった現象から、注意機能を改めて捉え直し考察を深めた。

また時間論や、受動的総合の分析からの注意の位置づけを論議し、能動的な自我が関わらないなかでの注意のあり方を探求した。さらに認知科学の知見も活用しながら、非自覚的な見落とし現象を念頭に置いて、注意がなされない事態をフッサールの注意論から解釈して、ある種の非自覚的な不注意においては、不注意であったが故にただちに責任が生じるとは言えない事態が生じうることを論述した。さらに注意論との関わりではあるが、関心の向け変えという現象の中から、いわゆる無意識的な振る舞いとしての身体運動の探求を試みた。

(5) さらに日常的な身体行為を事象として分析するにあたって、同様の事象をいわば研究素材とした西田幾多郎をとりあげ、フッサールと西田の身体行為に関する比較分析を行った。

より具体的には、「自動車運転」という日常生活のなかでの行為を事例として、西田幾多郎とフッサールの身体論を比較し、また両者の思想を相互補完することを試みた。

両者の身体論についての比較研究に関しては、主に現象学者から幾多の成果が呈示されている。しかしその類縁性は述べられるものの、両者の規定する主要概念の相違による差異性についてはさらに研究の余地が残されている。本研究はその差異性の確認を元に両者の思想の相補性を導いた。

西田の場合は、身体については行為的直観(論)という、若干奇妙な概念から導き出される。『善の研究』の「版を新たにするに当たって」で簡潔に自身の研究軌跡を論述しているように、初期の純粹経験の立場が変容深化することにより行為的直観が導かれた。純粹経験の主客未分化の状態を日常経験に即して論説し、さらにそれを先鋭化したのが知的直観である。知的直観は知覚と同じではないが同一種であると西田が断っており、その事例として芸術家の直観、宗教家の直観をあげている。本稿ではこうした常人にはたどり着け得ない事象について論説せず、それが知覚の極限としての知的直観という観点から、常人にも一定の技量を要し、また技量に関しては芸術の域に達することもある自動車運転を事例に扱う。この事例を範例として西田の思想の展開に関する自己解釈に即して、行為的直観を知的直観の深化として論説する。そこで場所の論理からの絶対無を、行為的直観が機能する場として捉えることにより、知的直観と行為的直観の連関を再構成する。さらに個物の自己形成を行為的直観の側から場所の論理に即して捉え直すことを試みた。

フッサールの身体論の要であるキネステーゼは、運動感覚と訳されるが、それはノエシス・ノエマの並行論のなかで規定されるのではなく、ヒュレー(感覚与件)との相互規定を生じさせる場面で論述される。たとえば眼差しの動きのなかで感じとられる色彩体験の変様に対応す

る動きの感覚体験である。そこには領野の構造化と動機付け、目的論的枠組みの形成がすでになされている。意識現象をノエシス・ノエマ論として規定する際の条件がそこに介在している。

西田はフッサールの論説からノエシス・ノエマ論を批判的に継承し、自らの思想をその文脈から展開している。しかしヒュレーとキネステーゼの分析によって、新たな視角から西田の場所の論理を展開することが可能であり、それによって行為的直観についても直観の文脈からその豊穡性を開くことが可能となった。

逆にフッサールはキネステーゼとヒュレーの相互制約から、その身体論と空間論を展開しているが、西田の行為的直観論を援用することにより、世界制作の方途を導いた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木康文	4. 巻 35
2. 論文標題 中期フッサールにおける知覚・直観・注意	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 倫理学	6. 最初と最後の頁 55-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木康文	4. 巻 31
2. 論文標題 フッサール現象学における注意・不注意の問題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北陸宗教文化	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木康文	4. 巻 35
2. 論文標題 初期フッサールにおける注意の問題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 哲学・思想論叢	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木康文	4. 巻 29
2. 論文標題 書評：中村直行『沈黙と無言の哲学 語りえないもの の語りえなさを語る』大学教育出版、2015年	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 北陸宗教文化	6. 最初と最後の頁 113-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木康文
2. 発表標題 西田とフッサールの身体論---その近さと遠さ
3. 学会等名 比較思想学会第47回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木康文
2. 発表標題 フッサールにおける意志と注意の問題
3. 学会等名 北陸宗教文化学会第26回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木康文
2. 発表標題 知覚・直観・注意---中期フッサールにおけるその位置づけ
3. 学会等名 北陸宗教文化学会第25回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木康文
2. 発表標題 注意 / 不注意と責任の所在---フッサールの注意論から
3. 学会等名 北陸宗教文化学会第24回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木康文
2. 発表標題 不注意の現象学-初期中期フッサールの資料をもとにして
3. 学会等名 北陸宗教学文化学会第22回大会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----